共通教養科目「心理学」をめぐって

人間科学部　丹 治　哲 雄



1976年の人間科学部設立時に助手として本学に赴任。故郷の鎌倉から移転して来た越谷での生活は今年で22年目を迎える。専門は実験心理学。

本年度は、共通教養科目の「心理学：実験心理学から人間行動を考える」（243名）・「心理学：対人関係の実験心理学」（289名）、学部科目の「心理学概論」（267名）、「心理学一般実験・演習」（124名）、「実験心理学」（33名）、「心理学特殊研究」（９名）、「卒業論文」（16名）を担当。本年度人間科学科学科長。（たじみ・てつお）

ここでは、私が担当している幾つかの授業の中から、後期開設の共通教養科目「心理学：対人関係の実験心理学」をとりあげる。この授業では、実証科学的な研究方法によってこれまでに明らかにされてきた対人関係に関する事実を中心に講義している。印象形成、対人魅力、対人認知と偏見、好意と愛情、恋愛行動などについての講義である。毎回、受講生自身が被験者となってその回のテーマに関連する心理実験や調査を実施し、次週にその結果をフィードバックするという方法を取りながら講義を進めている。

（１）はじめに

後期の共通教養科目「心理学：対人関係の実験心理学」は、毎年月曜日の１時限目に開設している。ここ数年、毎回300名以上の受講登録のある大規模授業になっている（本年度は289名登録）。ただ実際に授業に出席する学生は、登録者の約 60%～70%で 200～250名程度である。ここ数年、学内の学生ばかりではなく、他大学学生・他専門学校生徒の「モグリ」の受講も見られるようになった。ここでは、本授業で行っている、（１）私語・遅刻入室・無断退室禁止について、（２）授業内実験・調査、（３）意見質問用紙方式の三点について紹介してみることにする。

（２）私語・遅刻入室・無断退室禁止について

大規模授業の担当教員をまず悩ませるのは、授業中の私語、遅刻入室、無断退室などであろう。そこでこの授業では、第一回目講義の冒頭に、この授業では「講義中の一切の私語は許さない」「遅刻入室も一切認めない」「無断中途退室も一切許さない」と学生たちに宣言する。これは当然のことではあるが、授業中のこうした行為は、真面目に講義を聞こうする学生にとって大変迷惑な行為になる。「真面目に講義を聞き学ぼうとする学生たちに対して、こうした行為でそれを妨害することは、大学で何よりも守らなければならない学問をする権利に対する重大かつ深刻な妨害行為と見なす」、「もしこうしたことを守ることができないのなら、即刻教室からの退室を命じる」と学生たちに伝えるようにしている。こうした授業開始直後の教員からのメッセージに対して、学生たちは私のことを「何と厳しい教員だろう」と感じるようである。実際に２回目からの授業では、遅刻して入ってくる学生は入室を拒否しているし、私語が目立つ学生は教室からの強制退去を命じている（そう多いケースではないが）。

本授業では、毎回その回のテーマに関する資料を用意し、後述する授業内実験・調査や意見質問紙の配布回収を授業中に行っている。そうした資料を配布回収する時は「おしゃべ

り自由」としている。「ではこれから資料を配りますので、その間はどうぞ大きい声でおしゃべりをしていてください。ただし資料の配布が終わり私の話が始まったら私語はやめてください」。資料の配布が始まると、一斉に学生たちのおしゃべりが始まる。受講人数が多いので、一種類の資料を配布するだけでも５分以上はかかる。その間のおしゃべりは自由なのである。資料の配布が終わり講義が再開されると、学生たちは講義に集中し教室は静かになる。

学生たちの学期末レポートの「本授業の感想」の部分でこう書いてくれる学生も多い。「この授業ではしゃべっていい時と、しゃべってはいけない時のメリハリがはっきりしていて良かった。授業中にしゃべらないことがそれほど苦にはならなかった」。「第１回目の授業の時は、月曜日１時限目の授業なのに、何て厳しい事を言うのかと思った。でも数回静かな環境の中で集中して授業を聞いているうちに、これが当たり前なのだと思うようになった。授業の冒頭で厳しく言ってくれたことが大変よかった。今後もこうした姿勢は続けて欲しい」。今後もこうしたこちら側の姿勢を保ちながら講義を続けていきたいと考えている。

（３）授業内実験・調査について

本授業では、講義内容についての受講生たちの理解を助けるために、毎回、取り上げるテーマに関連した心理実験や調査を実施している。その回に出席している全受講生が被験者となる。受講生の回答した資料はその場ですべて回収する。資料には出席番号と氏名を明記させている。こうした提出資料は出席カードも兼ねているのである。授業中に実施する実験や調査であり、また、毎回 200 名～250 名程度の出席者がいるので、それほど複雑な実験や調査はできない。5～10 分程度で終了する比較的回答の簡単なものを用意するようにしている。回収したデータはその週のうちに集計と統計処理を行い、結果を分かりやすいグラフや表にまとめた印刷物にして次週に解説を加えて受講生たちにフィードバックしている。自分たちの回答結果が次週の教材の一部になるのである。

実施する授業内調査や実験は、年によって若干の変化があるが、昨年度は以下のようなものを実施した。「印象形成実験」、対人魅力要因の「近接要因調査」・「類似要因実験」・「身体魅力調査」・「魅力ある人柄調査」、対人認知に関する「ステレオタイプ実験」・「血液型ステレオタイプ調査・実験」・「情動二要因理論調査」、恋愛行動の「失恋行動調査」などである。この中には私が独自に開発したものや、また、先行研究を参考に授業用に手直しして作成したものなどが含まれている。また、対人心理学でよく使用される心理尺度を体験的に理解してもらうために、「対人判断尺度」、「好意愛情尺度」なども実施している。また、本授業は受講生数の多さからか、卒論作成の４年生や修士論文作成の大学院生から「授業中にデータを取らせてほしい」という依頼がよくくる。ただ、こうした依頼を無条件で許可しているわけではない。まず、本講義のサブタイトルである「対人関係の心理学」に関連あるテーマであること、また、比較的早い時期にデータを集計して、授業時間内にその結果を回答者である受講生たちに必ずフィードバックすることなどを条件にしている。それもまた教材の一部になる。

こうした授業内調査・実験への参加は、単なる一方的な講義を聞くというだけではなく受講生たちの本授業への参加意識を強める効果もあるようである。

こうした方式に対する学生たちの声を紹介したい。「楽しかった。今日はどんなアンケートや実験をするのかいつも楽しみにしていた」、「毎回テーマに関係した調査や実験があり、次の週に自分たちの回答結果を見ることができるので、この授業に参加しているという意識をもつことができた」、「単にこれまでの研究の紹介ではなく、自分たちの回答結果をもとに講義が進むので説得力があった」などなどである。今後も講義のテーマに沿った実験計画をあれこれ考えながら（これは楽し

い作業である)、こうした方式を続けていきたいと考えている。

（４）意見質問用紙方式について

この授業では、授業の冒頭にＢ５判の用紙を受講生全員に配布し、意見や質問がある場合は授業終了時にそれを提出してもらい、次週にそれらに回答する方式を導入している。意見質問の提出と成績とは関連づけないこと、記名でも無記名でもかまわないことなどをあらかじめ学生たちに伝えている。1995 年度からこうした方式を導入しているが、その年は 101 件の「意見質問用紙」の提出があった。初めは学生たちからの質問意見に対して次週授業の冒頭に口頭で回答するという方式をとった。次年度も同様の方式を採用したが、回答方式を口頭からプリントに変更して実施してみた。前週に学生たちから提出された意見質問とそれに対する回答をワープロで打ち、印刷仮綴じした「回答集」を作成して授業の冒頭に全員に配布する方法である。次年度の 1996 年度は 181 件の意見質問の提出があり、学生たちに半期で配布した「回答集」は総ページで 96 頁になった。翌年の 1997 年度も同様の方式を用いたところ、その年は 301 件の質問意見が提出された。質問意見の内容は、直接講義内容に関するもの、心理学全般に関するものなど、極めて多様である。また、学生からの意見が問題提起になり、他の複数の学生がそれに対して意見を提出するという紙上討論も複数例観察できた。こうした方式は、単なる学生からの質問と教員からの回答という形式を越えて、学生たちが自由に参加できる紙上討論の場を提供しうる方式といえよう。ここ３年、意見質問用紙の提出は増加傾向にある。活発で数多い意見質問の提出があると、こちらもうれしくなる。文教大学の学生たちは決して授業に対して無関心でも無気力でもない、何と知的好奇心の旺盛な学生たちだろうといつも感動してしまうのである。

学生たちの学期末レポートの「本授業の感想」の部分で本方式についての感想を紹介する。「毎回配布される回答集を読むのが楽しみだった」、「質問用紙を提出した翌週は、その答えがどうなっているかとわくわくしながら授業に出ることができた」、「一方的な受け身の授業ではなく、授業への参加意識や出席意欲が生じた」、「授業が常に全員参加であるというある種の一体感のようなものを感じた」、「自分たちも授業を作っているという気持ちになった」、「他の受講生の考えを知ることができて興味深かった」等々、この方式に関しては比較的肯定的な意見が多い。こうした学生たちの声を受けて、大人数の授業ではしばらくこの方式を続けていきたいと考えている。

４年前の 1994 年度に本授業で最初の「学生による授業評価アンケート」（評定者 215 名）を実施した。その結果、この授業は「教師に対して質問がしにくい授業である」との学生からの指摘を受けた。こうした方式はそこからからスタートしている。「学生による授業評価アンケート」や、そこから始まったこうした方式の詳細については、文教大学教育研究所紀要の第５号（1996 年）・第６号（1997 年）の「授業実践報告」に報告した。

（５）おわりに

ここで述べてきた「私語・遅刻入室・無断退室禁止」も「授業内実験・調査」も「意見質問用紙方式」も言ってみれば授業運営上の技術にすぎない。

私は、こうした授業運営を行いながら、学生たちに実証的科学的な心理学が明らかにしてきた対人関係に関する事実を知ってもらいたいと思っているし、また現代心理学の方法論についても理解を深めてもらいたいと思っている。さらに、何よりもこうした授業を通じて学生たち自らが持っている「対人関係観」、もっと言えば「人間観」を限りなく拡げていってほしいと願っている。「これから豊かに広がるかもしれないあなたがたの人間関係の可能性を、つまらない誤解や偏見のために自ら閉じてしまわないでほしい」というメッセージを学生たちに伝え続けていきたいと考えている。